悲願達成

インカレ男子エイトで優勝し、高らかに校歌を歌う中大の選手たち
（写真提供＝中大スポーツ新聞部）

先行逃げ切り
衰え知らずの推進力

ドイツ遠征がきっかけ フィジカル、技術力に磨き

ボート部 男子エイト
14年ぶりインカレ制覇に歓喜

ボートの花形、男子エイトで、ボート部が9月の第46回全日本大学選手権（埼玉・戸田ボートコース）を制した。決勝のレースでも、先行逃げ切りの“必勝パターン”でライバル校を退けた。6月のドイツ遠征を経て、たくましく成長した選手たちが14年ぶりのインカレ優勝の歓喜を分かち合った。

（写真提供＝中大スポーツ新聞部）

フィニッシュ直後、ガッツポーズをする中大の選手たち

「スタートダッシュで突き放す」

決勝（9月8日）に進出したのは、中大と、インカレ男子総合で昨年まで13連覇中の日本大学、今回のインカレ男子総合で初優勝を果たした仙台大学、伝統校の明治大学の4クルー。中大は「思い切りアタックして突き放す」（石塚慎之助選手＝法3、秋から新チーム主将）という必勝の戦法でスタートダッシュを決める。艇の推進力を最後まで落とさず、他校を振り切って、3位だった昨年の雪辱を果たした。

選手たちは陸に上がり、目を赤くした溝口健太監督と抱き合い、表彰式では涙を流しながら校歌を歌った。コックス（舵手）の小島発樹（たつき）選手（法3）は「うれしいとこんなにも泣けてしまうのか」と、自分自身に驚いたと振り返る。

3日前の予選、前日の準決勝をともに1位通過したが、予選のタイムは出場校中3番目で、日大、仙台大に後れを取った。「もう一度ドイツ遠征の経験を思いだして気合を入れていこう」。準決勝、決勝を前に小島選手が漕手のクルーに呼び掛け、全員が死力を尽くした。

艇の幅はわずか60センチほどだ

チームの個々のパワーをさらに一段、高みへと押し上げるきっかけとなったのがそのドイツ遠征だ。6月、ボートの強豪国、ドイツ北部のラッツェンブルクという町に1週間滞在し、本場の欧州チームとのレースなどを通じて、フィジカル、技術力の向上へ大きな刺激を受けた。

男子エイト・出場メンバー

		身長（センチ）	体重（キロ）	所属学部・学年
ストローク	S　石塚慎之助	187	85	法3
ミドルクルー	7　是谷　有輝	180	80	理工4
	6　久保　如竹	183	82	総合政策4
	5　徳永　貴大	178	80	商4
	4　塩田　義峰	183	80	商4
	3　二本松慎也	185	82	商3
	2　齋藤　拓馬	188	82	文3
バウ	B　千種　蒼大	175	75	理工3
コックス	C　小島　発樹	165	55	法3

現在、中央大学体育連盟ボート部は新艇を購入するための寄付を募っています。詳細はボート部ホームページをご覧いただくか、中央大学募金推進事務局に問い合わせてください。

中央大学学友会体育連盟ボート部公式HP：https://www.chuo-rowing.net

陸上でも艇上と同じ動きを繰り返せる特別なマシン。合宿所には20台近くそろっている

ハードな鍛錬の積み重ね「栄冠」導く

ドイツのU-23（23歳以下）代表候補と、クルーに五輪メダリストを含む英国の名門クラブ「モレシー・ボート」との3艇でレースをしたときのこと。スタート直後は付いていけたが、徐々に突き放された。風が強く、水面も荒れていた状況で、「舟を水平に保ちながら、まっすぐに進ませる技術力の差」（小島選手）にショックを受けた。フィジカルに裏付けられた技術力の高さ、全員の動作のタイミングを合わせる繊細な技術など、学び取りたいことばかりだった。

そして、ボート競技が文化、スポーツとしてしっかり根付き、幼少期からボートに親しむ環境があること、競技の裾野が広く、優秀な選手が次々に生まれてくることも遠征で実感した。

石塚選手は「しっかりとシンクロした動きができるよう、艇に触れる時間を長くしよう」と誓い、帰国後、猛暑の8月には連日、戸田ボートコースと反対側の荒川に仲間と艇を担いでいき、練習を終えるとまた担いで艇庫に戻った。さらにハードな鍛錬を積み重ねたチームはついにインカレの栄冠を勝ち取った。

石塚選手はこの秋から新チームの主将となった。来年はインカレなどで他校からのマークもきつくなるだろう。「主力の4年生が抜けて、チームの力はまだまだ優勝できるまでに届いていない。今まで以上に練習し、成長していきたい」と前を見据えている。

中央大学ボート部

1951年創部。1954年に全日本選手権舵手付きフォアで初優勝、1983年、エイト種目で全日本大学選手権と全日本選手権に初優勝。これまでに全日本選手権エイト優勝が5回、全日本大学選手権エイトは14回を数える。オリンピックは9大会で延べ26選手を輩出する学生ボート界の名門。

現在の部員は選手33人（男子22人、女子11人）、マネジャー17人。強豪校としては比較的、部員数は少ない。男子エイトの優勝艇「HAKURYU」は2012年の製造。白竜を意味し、白は「白門」から命名されたという。埼玉県戸田市の戸田ボートコース沿いに艇庫、合宿所があり、選手たちは授業日には後楽園キャンパス、多摩キャンパスにここから通学している。溝口健太監督は元日本代表、児玉剛始・男子コーチはアトランタ五輪日本代表。

近年の実績は、2018年アジア競技大会の軽量級男子ダブルスカル優勝、2018年インカレの男子シングルスカル優勝、女子舵手なしペア優勝、2017年インカレの男子舵手なしフォア優勝など。今年のインカレでは女子舵手付きクオドルプル（渡邊花穂、遠藤穂、溝口女華、米澤知華、近藤真優の各選手）で準優勝している。

さまざまな艇やオールなどが保管されている戸田艇庫＝埼玉県戸田市

つぶれるようなハイペースも…2000メートルを漕ぎ通せる自信

決勝のレース中、1分間にオールを漕ぐ回数が表示されるGPS機能付きの小さな機材が、石塚慎之助選手と小島発樹選手の足元に積まれていた。

通常の男子エイトの1分間に漕ぐ回数は36~38回程度だが、決勝の中大は1000メートル過ぎまで41~42回という「本当ならつぶれてしまうようなハイペース」（石塚選手）で進んでいた。最短距離を進めるように舵取りを担うコックスの小島選手も「600メートルまでに3回のスパート。声をかけた（指示をした）分だけ、クルーの皆が反応してくれた。疲れて酸欠状態になるようなこともなく、皆が冷静だった」と振り返る。

ボートは体力、気力の極限まで力を出し尽くす面のある競技であり、レース後まれに気を失ってしまう選手もいるという。石塚選手は「今回そうした恐怖心は全くなかった。2000メートルを漕ぎ通せる自信があった」と語り、「全員の動きがシンクロして、気持ちも高ぶった状態で進み、気づいたら勝っていた」と続けた。

艇と一体化した感覚はこれまで感じたことのないものだったという。中大ボート部の漕ぎのテーマ「大きく、強く」を体現したようなレースとなった。

実はドイツ遠征の直後、石塚選手と小島選手はチーム力アップの手応えを感じるレースを経験していた。2020東京五輪会場となる海の森水上競技場の完成記念レガッタ（6月16日）で、招待された英国のオックスフォード、ケンブリッジの名門大学より上位の成績を残したレースだ。日大には僅差の2位と後塵を拝したが、「1500メートルまでリードした勢いをフィニッシュの2000メートルまで持続できれば。ハードトレーニングを続ければ行けるはずだ」と自信が芽生えたという。

（写真提供＝中大スポーツ新聞部）

決勝レース　タイム

	500メートル	1000メートル	1500メートル	2000メートル（フィニッシュ）
1 中央大	1分24秒25	2分50秒21	4分18秒69	5分46秒51
2 仙台大	1分25秒61	2分52秒14	4分21秒12	5分47秒78
3 明治大	1分25秒06	2分53秒00	4分22秒36	5分48秒91
4 日本大	1分25秒87	2分53秒69	4分23秒12	5分50秒09

（日本ボート協会ホームページから）

ボート競技

1人が1本のオールで艇の左右どちらかを漕ぐスウィープ、1人が2本のオールを左右対称に漕ぐスカルに分けられ、1人漕ぎ（シングル）、2人漕ぎ（ダブル・ペア）、4人漕ぎ（クオドルプル・フォア）、8人漕ぎ（エイト）がある。艇上で舵取り役となるコックス（舵手）がいる種目、いない種目がある。

エイトは、船首に近い位置のバウから船尾に近い位置のストローク、その間のミドルクルー6人の計8人の漕手と、ストロークと向き合う形で最後尾の位置にコックスが乗る。全員の動作が見えるバウはアドバイスなどのリード役、漕手全員から見られるストロークは全体のオールの動きをコントロールする役割、コックスは最短距離を進む舵取りと、クルーがバランスよく漕げるような指示、ペース配分を考えた指示が大事な役割となる。

エイトのオールの長さは約3.8メートル、重さが約2.5キロ。選手の体重制限もあり、エイトのコックスは55キロ以上（上限なし）の決まり。中大コックスの小島発樹選手はレースのたびに約5キロ減量して55キロで出場するという。

鮮やかコテ2本 大将戦 仲間の声援に 応えた本間渉主将

剣道部が全日本学生優勝大会・男子団体で2年連続日本一

第67回全日本学生剣道優勝大会（10月27日、千葉ポートアリーナ）の男子団体戦で、中央大学は2年連続14回目の優勝を果たした。前回王者は目標とされ、どのスポーツでも連覇は難しいといわれる。まして学生競技は毎年、選手が入れ替わる。その連覇を目指した中大剣道部の今年のチームは、あえて「初心」をスローガンとした。「チームを一から作り直す。守るのではなく、一から戦っていく」。この思いが連覇となって実を結んだ。

２連覇に本間主将（右）、塩野選手も満面の笑み

決勝の中堅戦、
メンで一本を奪う中大の河崎遼選手（右）
（写真提供＝関東学生剣道連盟）

雌雄を決する男子団体・決勝の大将戦。本間渉主将（法4）は、開始2秒にコテで一本を取った。残り時間4分58秒で、相手に一本を奪われなければ、昨年に続く連覇が決まる。ただ相手は、今年6月の全日本学生選手権（個人）で優勝した、学生日本一の星子啓太選手（筑波大学）だ。主将にとっては高校時代（熊本・九州学院）の1年後輩に当たる。

「相手は学生剣道界のスーパースターのような存在。勝てるとも思わなかった…。でも、『頼むぞ』『しっかりしろ』と仲間の声援だけが聞こえてきて、本当に無我夢中で戦いました」

人生でダントツに濃かった5分間

後がなくなった星子選手も闘志をあらわに、攻めに攻めてくる。受ける圧力は相当だ。それでも、本間主将は「人生の中でもダントツに濃かった5分間」をしのぎ切った。逆に終了間際、面を取りにきた相手の右手にコテを一閃。鮮やかな2本勝ちで勝負を決めた。

コテは2本とも反射的に相手の右手をとらえたものだ。狙ったものではない。本間主将は「不思議とプレッシャーはなかったです」とも振り返り、緊張感の中でも気持ちに余裕があり、冷静だったことをうかがわせた。

決勝を前に整列した中大の選手たち。気合のこもった表情だ（写真提供＝中大スポーツ新聞部）

実は中大は、2回戦で高知大学に大苦戦していた。チームのムードも暗くなりかけた。このままではまずい。ここで、本間主将は「勝ち負けはどうでもいい。自分の試合が終わったら全力でチームメートを応援しよう」と、後輩の選手たちにガツンと言った。

チームを主務として支えてきた塩野源太選手（法４）は「あの言葉でチームが変わった」とうなずく。主将の一言は仲間を勇気づけ、再びチームに勢いをもたらした。

「試合に出場した選手も、出なかった選手も、みんなが自分の役割を果たしての優勝だった」。塩野選手はそう胸を張った。団体戦を勝ち抜くうえで欠かせないチームワークは、中大剣道部に受け継がれた伝統のひとつである。

優勝の賞状を受け取る本間主将

□ 剣道団体戦

大学男子は、先鋒、次鋒、五将、中堅、三将、副将、大将の７人同士が戦う。それぞれ3本勝負で2本先取した選手の勝ち。一本を取り、試合終了となった場合は一本を取った選手の勝ち（１本勝ち）。勝者数の多いチームの勝ちで、勝者が同数なら、一本を取った数の多いチームの勝ちとなる。

「１人が勝って、残りを守り切ればチームの勝利」「強い選手が１人いても、それで必ずチームが勝てるわけではない」などの点に面白さがあるという。2本負けを避けるため、あえて攻め込まずに１本負けにとどめるなど、個人戦にない駆け引きもある。

第67回全日本学生剣道優勝大会

中央大学出場選手

本間	渉	（法4）
丸山	大輔	（法4）
鈴木	雄弥	（法3）
沖	拓真	（法3）
河嵜	遼	（商3）
山本	浩輔	（文3）
清家	羅偉	（法2）
黒木	裕二郎	（商2）
山崎	将治	（商2）

優勝への軌跡

１回戦	中大３－０常葉大
２回戦	中大２－１高知大
３回戦	中大６－０龍谷大
準々決勝	中大３－２立命館大
準決勝	中大２－０明治大
決勝	中大３－２筑波大

決勝

中大				筑波大
黒木		ー		重黒木
○ 沖	メ	ー		寒川
山崎		ー	メコ	加納 ○
○ 河嵜	メ	ー		佐藤
清家		ー	メ	白鳥 ○
丸山	コ	ー	コ	松崎
○ 本間	ココ	ー		星子
3(5)				2(4)

コトパクシ山頂で笑顔を見せる
瀧澤さん（左端）と田島さん（右端）

南米アンデスの２峰にアタック

エクアドルとの外交関係樹立100周年友好合同登山

山岳部
田島圭悟さん（文2）
瀧澤　岳さん（文2）

山岳部の田島圭悟さん（文２）と瀧澤岳さん（文２）が９月、日本と南米エクアドルの外交関係樹立１００周年を記念した友好合同登山隊に、猪熊隆之・山岳部監督、山岳部OBの渡邉雄二さん（登山隊隊長）とともに参加した。4人は、世界一高い活火山と称されたこともあるコトパクシ（5897メートル）の登頂に成功し、瀧澤さんと猪熊監督がエクアドル最高峰のチンボラソ（6310メートル）の頂も極めた。6000メートル以上の高峰の現役中大生の登頂は4年ぶり。田島さんは「未熟だったところを克服し、次の登山につなげたい」、瀧澤さんは「高所に弱くない体質と分かったことは収穫でした」とそれぞれ振り返り、初めての国外登山の経験を今後の糧とするつもりだ。

標高5500メートル超、高山病の恐怖

エクアドルは南米大陸北西部に位置し、コトパクシ、チンボラソはともにアンデス山脈を構成する山だ。赤道直下で9月の春の陽気のもと、日差しは強く、高山のわりに天気は安定していた。友好合同登山隊に日本側からは総勢14人が参加した。

コトパクシには現地時間の9月6日午前6時ごろ、日の出前に登頂した。標高約4800メートルの小屋で仮眠後に出発し、山頂まで約7時間の行程となった。雪原となる手前では「砂ぼこりもすごく、マスクをして登った」（田島さん）そうだ。日が差し込んだ山頂の光景は美しかったという。「美しかった」という言葉では説明しきれない、一歩一歩の足取りを重ね抜いた者だけが目にできるものだろう。コトパクシは姿形が富士山に似ており、「エクアドルの富士山」と呼ぶ日本人も少なくない。

「C」のポーズで登頂を祝う（右から）田島さん、瀧澤さん

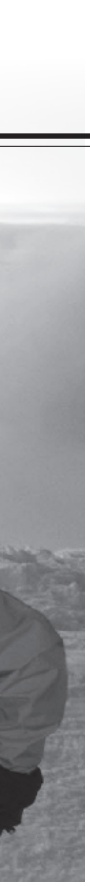
初の国外登山ということは、富士山以上の高度は初体験となる。2人とも標高5500メートル前後から高山病の症状に悩まされた。気分の悪さを解消するため、瀧澤さんは今夏の富士登山の際に渡邉隊長に教わった「深く吸って細かく吐く」という呼吸法を実践した。田島さんも「未経験の高所への恐怖感はあったが、頭痛薬を飲まないという縛り（条件）をつけた中で、日程を通して使わずに済んだことはよかった」と話す。

思わぬアクシデント、無念の下山

チンボラソへのアタックはその3日後。標高約5000メートルの山小屋から山頂まで約8時間の行程だった。「山頂が見えてきて残念だなと初めて

田島さん●

次につながる登山だった。在学中にもう一度海外遠征を。



深く吸って細かく吐く 高山病対策の呼吸法を実践。

● 瀧澤さん

感じるほど、体調がよく、楽しくハイペースで登れた」という瀧澤さんとは対照的に、田島さんは山頂に立てなかった。登山パートナーを組んだエクアドル側の山岳会関係者のヘッドライトに不具合が生じ、途中で引き返さざるを得なかったからだ。

無念の心境だったはずだが、田島さんは誰を責めるでもなく、「瀧澤はついている。自分は（運を）持ってないんだなあ」と笑って振り返り、「こういったことも克服できるように、未熟なところを直したい。次につながる登山でした」と冷静に話してくれた。

２人は中大入学後、本格的に登山を始めた。主な鍛錬の場は、長いクライミングルートや階段状のがけが存在する北アルプスの剣岳（富山県）や、群馬、新潟県境の谷川岳などだ。１年生のときは、まずは体力作りから始めた。谷川岳合宿で雪渓を登ったとき、瀧澤さんは「熱中症になり猪熊監督に支えられながら登った」という。鍛錬を繰り返すうち、体の重心の移動の仕方や歩幅など、山の歩き方を習得し、無駄な体力を使わなくなっていった。

なぜ山に登るのか。瀧澤さんは「ルートや登り方を自分で考えて、登り切ったときの達成感。より難易度の高い山にひかれるし、クライミングを究めたい」と魅力を語り、田島さんは「危険だと思う場所も乗り越えて、よかったと思う瞬間の繰り返しは刺激になる。在学中にもう一度は海外遠征したい」と抱負を話している。

猪熊監督
登山を通して人間的成長を

山岳部OBでもある猪熊隆之監督は、後輩の2人について「登山を始めて1年半での成長は目を見張るものがある」と、一歩一歩努力を重ねている点を評価している。

田島さんについて「山に対する情熱と、自分を追い込むトレーニングなど目標に向かって何をすればよいかが良く分かっている」と語り、チンボラソへの登頂を断念したときも「腐らずに、明るく礼儀正しく振る舞っていたのは彼のすごいところ」と褒める。

瀧澤さんについては「おちゃめなところがあり、登山隊の雰囲気を明るくしてくれた」と感謝し、「学生としては高所で強く、今後の高所登山に期待が持てる」と話している。

猪熊監督は山岳専門の気象予報士として知られ、現在は「山の気象遭難をなくす」という信念で、山の気象予報の提供を続けるヤマテン（長野県茅野市）の代表取締役も務めている。

「登山は、忍耐強さ、自然の恐ろしさと美しさ、充実感、かけがえのない仲間などいろいろなものを与えてくれる。さまざまなものを得て人間的に成長し、人生に勝利してほしい」と２人にエールを送っている。

トラック、ロード創部以来初の総合優勝

短距離「3冠」

山根将太主将（商4）が圧巻の走り

男子トラック、ロードの総合チャンピオン―。自転車競技部が8~9月の第75回全日本大学対抗選手権大会（長野県松本市・大町市）で、1953年の創部以来初の男子総合優勝を飾った。ケイリン、スプリント、チームパーシュートなどトラック9種目とロードの総合ポイント制で争われ、7ポイント差で2位の日本大学を振り切った。トラック短距離系種目で3冠を達成した山根将太主将（商4）、トラック中距離種目で優勝の山本哲央選手（経済2）、ロードで4位に入賞した奥村十夢選手（商3）の3人に、総合優勝の喜び、競技にかける思いなどを聞いた。

奥村十夢選手はロードで4位に入賞、総合優勝に大きく貢献した

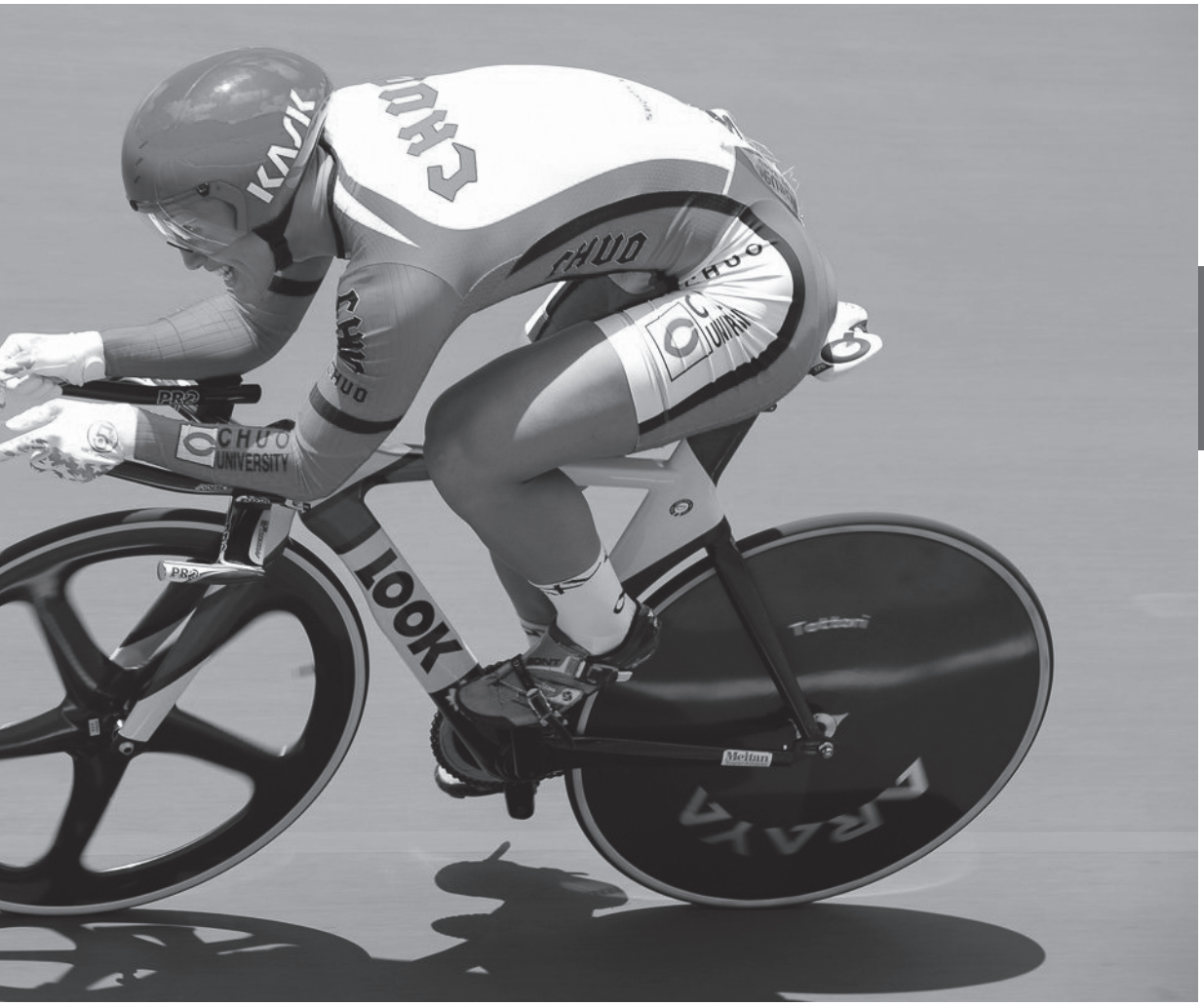
「おしり大きくなり、良い走りに」

大会で圧巻の走りを見せたのが山根主将。スプリント、1キロタイムトライアルの個人種目に加え、チームスプリントでも優勝し、短距離「3冠」を成し遂げた。スプリント、1キロタイムトライアルはともに学連新記録、チームスプリントは18年ぶりの日本記録更新に大きく貢献した。

高校から本格的に自転車に打ち込み始めた山根主将は、自身の強みを「トップスピードを長い時間維持できるところ」と分析し、「おしりが大きくなり、春ごろから良い走りができるようになった」と、現在も伸び盛りのパワーの秘密を話す。3年間、寮の同じ部屋で暮らしている奥村選手も「普段はのほほんとしているのですが、試合では頼りになる先輩。3冠はすごいの一言です」と驚く。

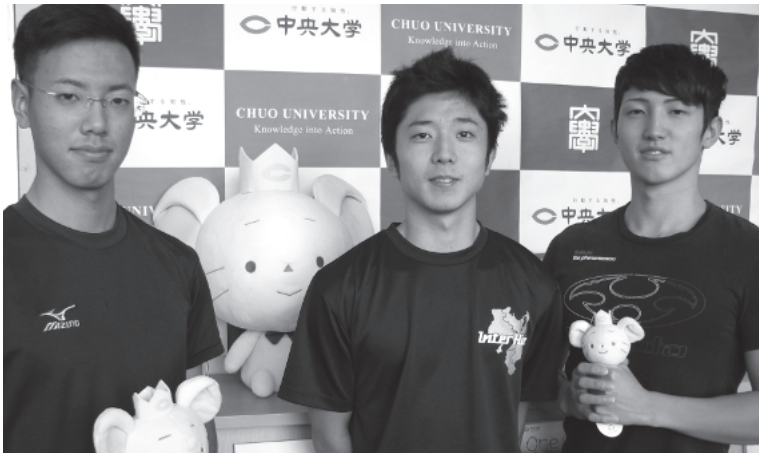
山根主将は将来、競輪選手を目指している。「けがをしないようにして、息長く続けたい」と抱負を語り、「総合優勝は各部員が各種目で全力を出した結果の積み重ね。本当にうれしい」と仲間に感謝する。

奥村選手は、優勝を目指したロードで4位と不本意な成績となったが、



「3冠」を制した
山根将太主将のパワフルな走り

自転車競技部
全日本大学対抗選手権で快挙



全日本大学対抗選手権で活躍した（左から）山本哲央選手、奥村十夢選手、山根将太主将

総合優勝には満足しているという。長い時間、長い距離を平均したスピードで走れる点が長所で、「自分の限界を超えたいという思いがいつもある」と自転車と向き合う姿勢を語り、次のように続けた。

自分を追い込んだ先にあるもの

「たとえば、足がつった状態で走り続けた先に何があるのか。自分を追い込んでいった先に何があるかを知りたいんです。それを知っておけば次に生かせる。心に余裕をもって落ち着いて走れるでしょう」

深く自身を顧みる姿勢は求道者のようだ。そんな奥村選手の走りについて、山根主将は「安定して力を出せる。調子の波がない」とたとえている。

一方、4キロインディビデュアルパーシュートに優勝した山本選手は、“本職”といえるロードは7位だった。「本当はロードも勝ちたかったが、2年生でトラックで優勝でき、自信をつかめた」と力を込めた。

一段の成長を促したのが、今年2月のU－23（23歳以下）ナショナルチームとしてのフランス遠征。連日、150キロのロードを走り込み、現地の4レースに出走した。「密度の濃いレースで、駆け引きを学べた」という。山根主将も「（山本選手は）すべての面で強くなり、別人になって帰ってきた」と振り返る。

それでも、今回のロードでは「思い描くスピードを維持するスタミナの不足」を痛感した。「1人で速いペースを刻み続けられる」という長所を武器に、さらなるパワーアップを胸に秘めている。

来年の自転車競技部は現在の2、3年生がチームの中心となる。奥村選手は「今の4年生の先輩は実力者が多かった。トラックを中心に4年生の抜けた穴をチームとして補い、総合連覇を目指したい」と力強く語っている。

□ 中央大学自転車競技部

1953年創部。現在の部員数は19人と少数精鋭。例年、全日本大学対抗選手権の総合優勝を目標としている。昨年は同選手権のロード部門で初の総合優勝を果たした。トラックの選手は主に室内マシン、ロードで練習を積む。ロードの選手は江の島や奥多摩、山梨県道志村などまで練習で駆け抜けることもあるという。

第75回全日本大学対抗選手権 自転車競技大会

○トラック
8月24～26日、
松本市美鈴湖自転車競技場
（1周333.33メートル）
○ロード
9月1日
大町市美麻地区　公道周回コース
（174.2キロ＝1周13.4キロ×13周）

男子総合成績

	総合ポイント	トラックP	ロードP
1 中央大	95	80	15
2 日本大	88	57	31
3 明治大	64	63	1
4 日本体育大	60	59	1
5 早稲田大	41	41	0

中大勢の優勝成績（カッコ内は優勝タイムなど）

○チームパーシュート（4分08秒822）
橋本陸（商4）、山本哲央（経済2）、青木瑞樹（商2）、今村駿介（法4）
○4キロインディビデュアルパーシュート（追い抜き勝ち）
山本哲央（経済2）
○チームスプリント（59秒411）
梶原大地（商4）、山根将太（商4）、東矢圭吾（法3）
※優勝タイム「59秒411」は18年ぶりの日本新記録
○1キロタイムトライアル（1分01秒390）
山根将太（商4）
○スプリント（10秒182）
山根将太（商4）

トラック種目で大活躍の山本哲央選手はロードにも出場し、7位の成績を収めた

「慣熟歩行」でコース熟知 安定した走りを披露

自動車部 全日本学生ジムカーナ選手権・男子団体V

自動車部が9月1日の2019年度全日本学生ジムカーナ選手権（三重・鈴鹿サーキット）の男子団体部門で優勝した。出場した3選手が実力通りの安定した走りを見せた。ジムカーナは、パイロンを立てた舗装路を自動車で単独で走行するタイムトライアルで、学生モータースポーツ界の花形競技。優勝に貢献した松島拓巳チーフメカニック（理工4）、ハンドルを握り疾駆した村田允（まこと）選手（商4）に頂点に立った喜び、自動車や競技の特徴、魅力を聞いた。

「瞬時の判断」求められるドライバー

「慣熟（かんじゅく）歩行」。耳慣れない言葉だが、ジムカーナでは大事な要素だという。レース開始前にコースのレイアウトが発表された後、各選手がコースを熟知するために実際に徒歩で立ち入ることを指す。路面の状況やレイアウトを目視で確認する機会が設けられているのだ。大会ごとにコース設定は異なる。

ジムカーナでは1回の想定走行タイムが45秒から1分30秒と短い中で、ドライバーに瞬時の判断が要求される。慣熟歩行でコースの特徴を記憶し、360度のターン、ジグザグ走行、パイロンの周回などが待ち構える走路で、ハンドルをどう切って、さばいていくかを想定する。村田選手は「コースを歩いて風景を覚える。（進行方向が）パイロンの右なのか左なのか、ライン取りはどうか、瞬間的な反応が求められる」と強調する。パイロンに接触すれば走破タイムに規定の秒数が加算され、致命的なミスとなってしまう。

松島チーフメカニックは、サーキットに車を送り出す立場として、「大会でしっかり完走すること」をいつも目指している。「当たり前ですが結果がついてくることがやりがい」と語り、優勝が分かった瞬間は金田康之介主将（文4）、村田選手らと肩を組んで喜び合った。4年生を中心に歓喜の輪ができたという。

ジムカーナ優勝のトロフィーに囲まれ、笑顔を見せる松島チーフメカニック（左）と村田選手

ジムカーナ王者のOBも“応援”

実は慣熟歩行は、1回目と2回目の走行の間にも行える。この大会でジムカーナ個人部門を2017年、2018年

全日本学生ジムカーナ選手権に出場した部車の「ホンダ　シビックタイプR　EK9」

と連続で制したOBの廣瀬正典さんが、その合間の慣熟歩行で選手たちと一緒にコースを歩き、攻略法などをアドバイスしてくれた。これもチームの好成績を後押しし、今大会は20以上の大学が出場する中で、男子団体優勝に加え、個人でも村田選手が準優勝、川村隆之選手（経済３）が３位で表彰台に乗った。

村田選手は「車の調子が良く、思い通りに動いてくれた」と、松島チーフメカニックに感謝し、「運転技術と精神力に裏打ちされた本番での強さが求められる」とジムカーナの厳しさをたとえている。

トロフィーや賞状を手にする自動車部員ら＝９月１日、三重・鈴鹿サーキット

2019年度全日本学生ジムカーナ選手権大会

＜団体順位＞

1 中央大
2 芝浦工業大
3 早稲田大

＜個人順位＞

1 高橋　響　（芝浦工業大）
2 村田　允　（中央大）
3 川村　隆之（中央大）
15 金田康之介（中央大）

ドライバーの技量、車のセッティングが重要

☆ジムカーナ

任意に設定された舗装路のコースを競技車両が単独で走行するタイムトライアル。１台ずつ出走し、各ドライバーは2回まで走行可能。速かった方のタイムが記録となる。誤ってパイロンに触れた場合はペナルティーとして規定秒数が加算される。平均速度は比較的低く、馬力よりもドライバーの戦略やコーナリング、ブレーキングの技量、車両の細かなセッティングやタイヤの選択が重要だという。今大会の鈴鹿サーキットにおける最高速度は約120キロ。1台ずつの走行で車両同士の衝突の心配はなく、舗装路の走行で車が傷つきにくいことなどから人気がある。

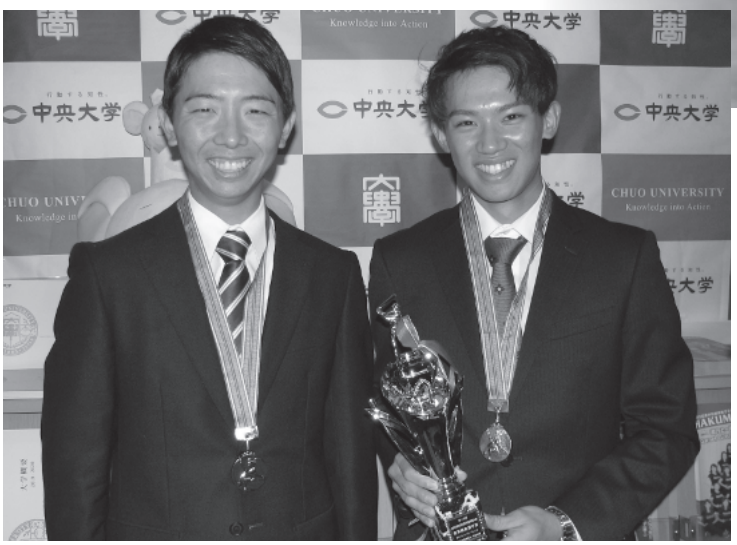
男子団体戦はチームの合計タイムで競い、今大会で中大は金田康之介主将、村田允選手、川村隆之選手の３人が、部車「ホンダ・シビックタイプR　EK9」とともに出場した。別の時期に行われる「ダートトライアル」「フィギュア」との３種目の総合点で順位を競う全日本学生自動車連盟年間総合杯（全日本総合杯）があり、自動車部が毎年、最大の目標としている。

先手必勝

見事なセーフティーバントで出塁

軟式野球部が第42回全日本学生選手権（8月、奈良県）で、3年ぶり3回目の優勝を果たした。決勝では初回に2点を先制、終始優位に試合を進めて、終盤に相手を突き放した。初回に先頭打者が出塁して先取点を奪取、ゲームの主導権を握ったことが勝因のひとつだった。勝つために緻（ち）密な野球を追求し、その先に日本一の栄冠があった。

先制のホーム踏む MVPに河野赳選手（理工3）



学生日本一のメダルを提げ、トロフィーを手にする河野赳選手（右）と小笠原春樹主将

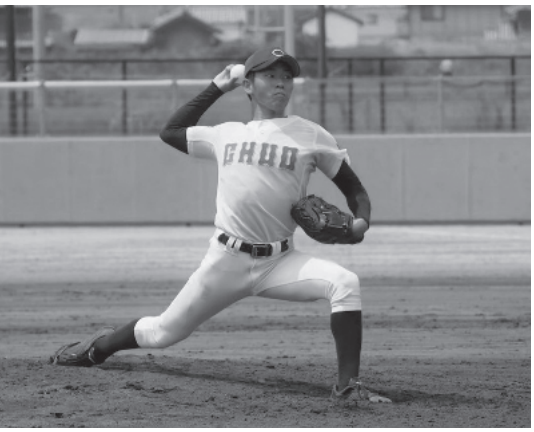
軟式野球部 全日本学生選手権で 3年ぶり3回目の優勝

初回、電光石火の活躍

「先取点を必ず取る。そのために何としても塁に出る」。警戒して前に出てきた三塁手が横目に入り、とっさにプッシュ気味のバントをショート前に転がした。一目散に一塁に駆け込み、セーフ。すかさず二盗も決め、2番打者のヒットで難なく生還する。中大のリードオフマン、河野赳外野手（理工3）が電光石火の活躍を見せた。

河野選手は1番打者として出塁率を上げるため、日頃からセーフティーの練習を怠らない。一塁線、三塁線だけでなく、ショート前、セカンド前に上手に転がす練習も重ねている。得意なセーフティーバントが自分の一番の武器だと思っている。

軟式野球の特徴として、「連打がなかなか続かない。硬式以上に先取点の持つ意味が大きい」と小笠原春樹



大会で大活躍し、最優秀投手に選ばれた千葉宥喜人投手

主将（文３）は話す。このため、河野選手の“値千金”のセーフティーバントに「あれで試合の主導権を握ることができた」と感謝する。

チームは、東都春季リーグ戦で２位だった。全日本学生選手権は２位以上の大学に出場権が与えられる。昨年と一昨年は春季で優勝して進出したが、全日本では勝てなかった。昨年の決勝は延長十四回に逆転サヨナラ本塁打を打たれて負けた。いったいどうすれば勝てるのか。

勝つために細かい野球を徹底

チームは勝つために細かい野球の練習を徹底した。夏の７泊８日の福島合宿では、「１点」をめぐる攻防を想定した練習を繰り返した。スクイズや送りバント、相手に１点をやらない守りなどにこだわった。「１位で全日本に行けなかった悔しさをバネに練習に打ち込んだ」（小笠原主将）という。その効果は全日本の試合で表れ、とくに成蹊大学に６―５で競り勝った準決勝は、サヨナラ・スクイズを含む３点をスクイズで奪った。

大会の最高殊勲選手（MVP）に河野選手、最優秀選手に林達也選手（経済３）、最優秀投手に初戦と決勝戦を完投した千葉宥喜人投手（経済２）が選ばれた。

硬式野球と違う軟式の特徴は、文字通りボールが軟らかく、よく弾むところだ。投球をバットで地面に強くたたきつける「たたき」と呼ぶ打法を得意とする選手もいる。一種、大根切りのようなスイングだ。たとえば、三塁に走者がいれば、球を高く弾ませることでホームに生還する時間の猶予をつくる。ただ、習得するには「なかなか難しい技術」（河野選手）という。

小笠原主将は「軟式は点が入りにくいから、守りに力を入れる。いかに点をやらないかを考えるのも面白さ、楽しさのひとつなんです」とその魅力を話している。

第42回全日本学生軟式野球選手権
中大軟式野球部の勝ち上がり

▽準々決勝（8月20日）

中央大	０３１２０００－６
松山大	４０００００００－４

（中）千葉―長谷川
（松）牧野、井上、鈴江―三澤

▽準決勝（21日）

成蹊大	００２００２０１０　－５
中央大	０２１０１０００２×－６

（成）相本、徳永、小池―丸
（中）前田、中川―長谷川

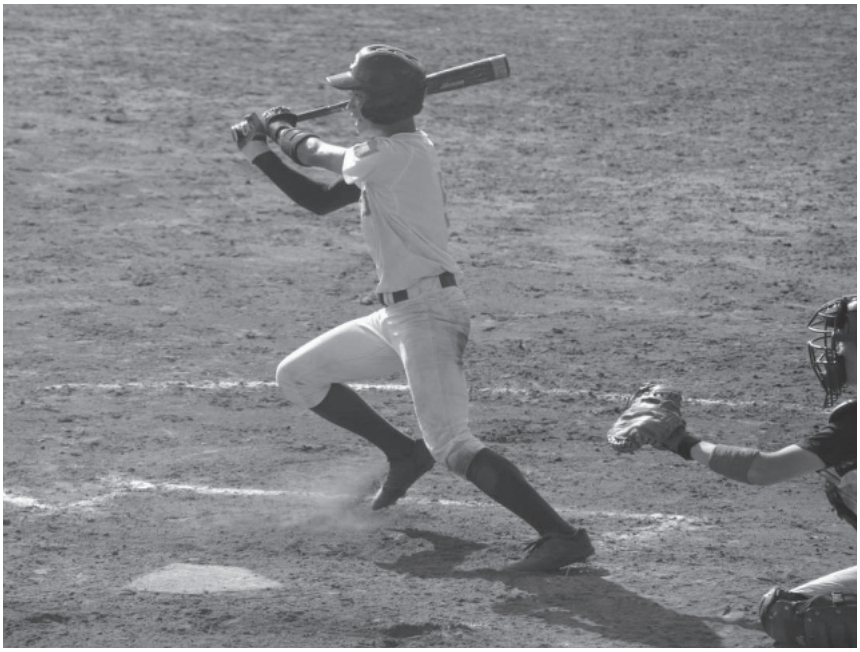
▽決勝（22日）

中央大	**２０００００００２０－４**
大和大	**００１０００００００－１**

（中）千葉―長谷川
（大）新田、乾、中村―宇佐川

決勝戦　中大　先発メンバー

1	河野　赳	中堅手（理工３）
2	林　康平	一塁手（経済４）
3	榊田　竜也	二塁手（商３）
4	竹井　錬弥	右翼手（総合政策３）
5	吉田　武弘	左翼手（経済２）
6	林　達也	遊撃手（経済３）
7	長谷川晃太郎	捕　手（経済２）
8	千葉宥喜人	投　手（経済２）
9	小笠原春樹	三塁手（文３）



最高殊勲選手に輝いた河野赳選手のバッティング